

科研費基盤研究(C)

課題番号 26370296-00

分野 人文学

細目 英米・英語圏文学

課題名 近代英文学における日本の表象に関する実証的研究

研究代表者 原田範行（東京女子大学教授→現在、慶應義塾大学教授）

【研究目的（概要）】

17 世紀から 18 世紀にかけての近代英文学は、イギリスの国際関係を反映して作品の舞台が世界各地に及んでおり、そうした諸地域に関する当時の認識や地理的世界観に関する研究が不可欠である。なかでも日本については、鎖国下でありながら、デフォーやスウィフトの著作をはじめ、多くの言及があり、『ガリヴァー旅行記』のように作品展開の枢要を担っている場合もある。しかしながら、当時のイギリスにおける日本についての情報、そしてそれに基づく作家の作品執筆の具体的経緯については、驚くほど先行研究が少ない。本研究は、とりわけ未解明な部分の多い 1660 年の王政復古以降、ケンペルの『日本誌』が刊行される 1727 年までの時期に焦点を絞り、近代英文学における日本の表象を実証的に研究しようとするものである。

【研究目的（詳細）】

17 世紀から 18 世紀にかけてのイギリスは、オランダやフランスと競合しつつ、人的・経済的交流はもとより政治的・軍事的な世界戦略を実質的な形で展開した。この時代に生まれた近代英文学の作品の舞台が、広く世界各地に及んでいるのは、こうした事情を反映したものである。したがって近代英文学研究においては、当時のイギリスの作者と読者が有した視野の地理的な広がりや世界の諸地域に関する彼らの知識や情報を確かめることが、作品成立の具体的な経緯を考える上で重要である。このことは、近代英文学の諸作品が、そもそも作品成立時に有していたある種のグローバルな性格を明らかにするものとして、近年の学術書や国際学会において特に重視されている。むろんこうした傾向は、英語で書かれた文学作品を共有することによる英語圏の新たな世界戦略として捉えることもできるし、わが国の英文学研究がそうした流れをよく吟味しなければならないことは言うまでもないが、近代英文学における日本の表象については、まずその基礎となる先行研究、すなわち、当時の日本の表象がいかなる知識や情報に基づくものであり、それがどのように作品成立につながったのか、という問題に関する実証的研究自体が驚くほど少ないのである。それは、近代英文学研究の世界的なスタンダードにおいても、また英文学研究と日本という比較文化論的観点においても、早急に解明されるべき課題であると考えられる。

実際、当時のイギリスの出版物に登場する日本表象の数は、地理的な隔たりにもかかわらず

ず、そしてわが国が鎖国下であったにもかかわらず、きわめて多い。例えば、島田孝右氏の書誌的研究である『日本関連英語文献書誌 1555-1800』(2012)などによれば、17世紀および18世紀の200年間で日本に関する言及のある英語文献は、3,000点を越す規模であることが分かる。小説の誕生やジャーナリズムの発達といった近代英文学の重要な要素が含まれる、1660年のイギリス王政復古以降、サミュエル・リチャードソンの小説『パミラ』が刊行される1740年までに限っても、その数は1,000点にのぼる。言うまでもなくこの時期には、フランソワ・カロンの『日本大王国史』(英訳、1663)、アーノルド・モンタヌスの『日本誌』(英訳、1670)、エンゲルベルト・ケンペルの『日本誌』(1727)など、日本でも比較的よく知られた史料とともに、ジョージ・サルマナザールの『フォルモサ』(1704)、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(日本への言及はその第三部で刊行は1720年)、ジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』(1726)など、やはり日本でもよく知られたフィクションが続々と出版された。『ガリヴァー旅行記』の場合、日本は、小人国や大人国などと並ぶ作品の舞台として描かれるわけだが、それとともに、作品に登場するイギリス以外の唯一の实在の国として、作品成立への独特な影響が認められるのである。それにもかかわらず、こうした日本の表象は、従来、重要な作品群にあっても散発的に言及される程度であり、史料調査をもとに作品創造の経緯を具体的に解明するには至っていない。

こうした状況を踏まえ、本研究では、対象を近代英文学の一つの出発点と考えられる1660年の王政復古から、ケンペルの『日本誌』が刊行される1727年までに絞って研究を進めることにしたい。1727年を一つの区切りと考えるのは、従来の日本紹介に比べ、ケンペルの『日本誌』が実際の訪日記録に基づく精度の高い著作であり、この著作の普及によってヨーロッパ諸国における日本についての一般的な知識が、それ以前とは質的に異なるものになったと考えられるためである。逆に言えば、1660年から1727年までの時期のイギリスにおける日本理解は、1600年に来日したウィリアム・アダムズの表象の残影などと、ケンペル以降、次第に明確化してくる日本像のはざまにあって、最も解明の進んでいない部分であり、本研究の成果が期待されると言えよう。

本研究で明らかにすることは、具体的に言えば、次の三点である。第一に、この時期の英語文献に登場する日本の表象を詳細に分析し、その特徴を文化史的な文脈に沿って体系的に整理するということである。先述の島田氏の書誌はこの基礎資料となるものであり、書誌情報さらに充実させることが必要である。しかしそれと同時に、近代英文学と日本の接点を明確にするには、書誌的記述にとどまっている日本への言及の内容と背景事情を詳細に吟味・分析し、それを文化史的に整理することが必要である。第二には、第一の点で示された史料分析の成果をもとに、先に挙げたサルマナザール、デフォー、スウィフトの三人の作家の作品を中心に、近代英文学黎明期にあって、日本の表象がフィクションの中で果たしている機能を考察することである。この考察は、実録旅行記や伝記、社会風俗を記した定期刊行物などと密接にかかわりながら生まれ、瞬く間に重要な表現ジャンルとして確立するに至った近代小説の成立事情の研究にも重要な貢献をすることになる。日本への言及は、それほど

までに数が多いのである。そしてこの研究を実証的に進めるために、当然のことながら、当時の文献など、作家が具体的に手にしていた日本関係の文物を確認する必要がある。例えばスウィフトについては、現在、ドイツのミュンスター大学スウィフト研究所内において最晩年の蔵書がほぼ復元されているが、デフォーやサルマナザールについては没後の蔵書の売り立て目録などが残るのみで、彼らが得ていた知識や情報を具体的に知る手がかりは不十分である。したがってこの第二の目的は、こうした作家の伝記的研究にも資するものとなる。そしてこのことから、本研究で明らかにすることの第三の点が導かれる。すなわち、1660年から1726年にかけて、オランダ東インド会社等を経由して日本からイギリスやオランダに伝えられた文献、特に日本や中国の物語類の伝播に関する基本的な状況を明らかにすることである。もちろんこうした物語類の中には既に知られているものもあるが、実際にはそれを上回る数の文献がヨーロッパに伝わっていたことは、ライデン大学の日本文献収集などからも容易に推測できる。もちろんこれらの文献をイギリスの作家たちが直ちに利用したとは考えられないが、そうした具体的な書物の移動が、そこに語られた物語についての知識の伝播をも促した可能性は十分に考えられる。日本からイギリスへの文化的影響については、例えば19世紀末ジャポニスムなどがよく知られているが、例えば『ガリヴァー旅行記』などの描写を精査すると、この近代初期における日本からの影響も十分に考えられるので、この点についての基本的な状況を史料調査によって明らかにする必要がある。つまりこの第三の点は、第二の点と補完的なものになる。

このような本研究が近代英文学研究全体に重要な影響をもたらすことは、少なくとも次の二つの点で明らかである。第一に、作家が手にしていた具体的な知識や情報の一端が明らかになることで、近代初期イギリスにおける地理的世界観の一部が明確になるということである。本研究では、研究の効果を高めるために、対象を日本に限定するが、当時の日本の表象の意味が明確になれば、それはイギリスの東アジア諸地域との関係を考察することにもつながるであろう。あるいはまた、文献の往来という具体的な交流が、言説空間においてどのような形で報じられ、物語化していったのかという問題は、近代ジャーナリズムの誕生やいわゆる「公共圏」の特質を考える上でも重要な貢献となるに違いない。本研究が近代英文学研究に与える第二の重要な影響は、散文の発達と小説の誕生を特色とする時代にあつて、日本をめぐって、個別の作家の作品執筆の経緯が具体的に明らかになる、という点である。このことは、事実とフィクションをめぐる小説の表現領域を考察する上で重要な知見を与えるものとなる。事実とフィクションの境界のあり方、その境界が作品の展開やプロットに与えた影響などについて、実証的に検証できるからである。

以上のように本研究は、近代英文学分野における現在の研究動向を踏まえ、近代英文学が本来有していたグローバルな要素の抽出を、1660年から1727年における日本の表象という未解明な部分の多い内容に特化して行うものである。既存の先行研究や書誌的情報などを活用しつつも、その欠を補い、作家が実際に手にしていた日本に関する知識や情報の詳細を実証的に明らかにしつつ、作品創造の実際を具体的に明らかにする独創的な研究になる

ものと考えられる。

【研究計画・方法（概要）】

本研究は、研究目的の項に記した具体的な三つの研究内容の第一、すなわち、近代初期イギリスの日本表象として既に書誌的情報にあるものの内容を吟味し、それを文化史的文脈の中で整理し体系化することから始める。この基礎作業により、当時の日本表象の全体像が鮮明になり、個別作家との接点が明確になる。次いで、研究内容の第二、すなわち、日本表象をめぐる特に三人の個別作家の執筆経緯を検証する作業に入る。この作業は、特にサルマナザールとデフォーに関しては基礎的文献が不足しているため、研究期間がある程度長期に及ぶ。したがって研究内容の第三、すなわち文献そのものの往来についての調査・分析は、第二の研究と並行させ、サルマナザール、デフォー、スウィフトの三人の事例を具体的な手がかりとしつつ、より確実な形で進めていく予定である。

【研究計画・方法（詳細）】

本研究は五年の研究期間を予定している。初年度（平成 26 年度）は、研究目的の項に記した具体的な三つの研究内容の第一、すなわち、1660 年から 1727 年にかけての近代初期イギリスの日本表象として既に書誌的情報に記載されているものの内容を吟味し、それを文化史的文脈の中で体系化することを中心とする。『日英交流史近世書誌年表』（2005）および『日本関連英語文献書誌 1555-1800』（2012）によれば、この時期に刊行された英語文献で日本への言及が見られるものは 500 点を越す。この中には、フランソワ・カロンの『日本大王国史』（英訳、1663）やアーノルド・モンタヌスの『日本誌』（英訳、1670）から、エンゲルベルト・ケンペルの『日本誌』（1727）に至る日本関係の具体的な史料や、サルマナザールの『フォルモサ』（1704）、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』第三部、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』（1726）のように、言及がかなりの規模になるフィクションも含まれるが、同時にきわめて短い単発的な言及や比喩的言及なども少なくない。そこでまずは、先に挙げた書誌情報に記載された文章の内容を吟味し、その内容や情報の由来に応じて、それぞれの日本への言及の性格を整理し、この結果をイギリスの文化史的文脈において体系化していくことにする。特に、ある一冊の文献をもとに複数の言及が数十年間にわたって見られるという場合もあるので、知識や情報の由来調査を徹底することで、既存の書誌情報の精緻化をはかることができよう。また、この時期の日本表象には、例えば日本やアジアを扱った地図に日本の様子を描いたと思われる風物が挿絵のように描かれたりしている場合もあるので、そうした史料にも十分配慮したい。なお、日本表象の質を分類する文化史的文脈の枠組みとしては、政治的関心によるもの（日本を比喩的対象とする場合も含む）、経済的関心によるもの（交易などに関する実務的言及を含む）、生活文化への関心や地理的世界観を反映したもの、などを中心に事例を整理していく予定であるが、この段階で既存の書誌情報に掲載されていないものが確認されることも考えられるので、その場合には、枠組みを

若干変更することになる。

これら研究初年度の作業は、日本の研究機関でも、EEBO (Early English Books Online) や ECCO (Eighteenth-Century Collection Online) などのデータベースが利用可能であること、また欧米の有力な大学図書館や資料館の蔵書資料の書誌的事項については、概ね、ネット上での検索が可能となっていること、資料整理に大学院生 (2名を予定) の助力を得られること、などから主に日本で、研究代表者の所属大学で実施することになる。ただし、日本に関する記述の見られる文献の中には、比較的マイナーなものも少なからずあり、それらの中には上述のデータベースに本文が収録されていないものもあるため、イギリスの大英図書館、ボドリアン図書館、ケンブリッジ大学図書館、スコットランド国立図書館およびアイルランドの国立図書館などを利用した補完的な調査が必要である。またこの研究第一段階の成果は、第二、第三段階への基礎となるものであり、史料調査としても重要な価値があると考えられることから、本研究分野の国内外の学術誌によって、研究初年度が終了次第、できるだけ早めに研究成果の報告を論文にまとめたい。

研究二年目から三年目においては、上述の第一段階の総括と報告を国内外の学術誌において行うとともに、この第一段階で得られた文化史的知見を基礎に、研究の第二段階、すなわち、日本の表象をめぐる、サルマナザール、デフォー、スウィフトの三人の個別作家の作品執筆の具体的経緯と日本の表象を実証的に検証する作業に入る。三人の作家のうち、スウィフトについては、ミュンスター大学において彼の最晩年の蔵書を検証・復元する作業が進んでおり、これによって彼の知識や情報の範囲についてはある程度まで正確に把握することが可能である。もっとも、例えば『ガリヴァー旅行記』執筆時の彼の蔵書は、最晩年のそれとは異なるものである。パスマンとフィンケンによるスウィフトの読書遍歴を網羅的にまとめつつある書誌 (The Library and Reading of Jonathan Swift: A Bio-Bibliographical Handbook, 2003-) などを利用することが可能であるが、しかし、スウィフトが青年時代に仕えた政治家にして外交官 (駐オランダ英国大使等を歴任) であったウィリアム・テムブルの知識や情報との接点などについては、なお十分な調査が必要となろう。他方、サルマナザールとデフォーについては、いわゆる蔵書目録はほとんど未整備といってよい。もちろんデフォーについては、例えば、ヘルムート・ハイドンライヒが編集した記録 (The Libraries of Daniel Defoe and Phillip Farewell: Olive Payne's Sales Catalogue, 1731 (1970)) などがあるが、増補作業は行われておらず、デフォーの知識の体系と読書遍歴の本格的調査は、2000年以降に刊行された全60巻におよぶデフォー全集をもとに今後の作業を待たなければならないというのが学界の現状である。またサルマナザールについては、作品名のみよく知られているものの、先行研究は英米においてもほとんどなく、基礎資料の整備も進んではいない。こうした状況を踏まえ、近代英文学の黎明期に活躍したこの三人の重要な作家について、第一段階で捕捉した日本への言及箇所を精査を中心に、作品中での日本表象の機能を分析していく。当時の日本の表象は、実在の国としてのものなのか、それともあくまでもフィクションとしてのものなのか、といった問題意識を、具体的な作品分析の際に生かしてい

きたい。また、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』などにおける日本の表象は、既にいち早くウィリアム・エディらも指摘している通り (Gulliver's Travels: A Critical Study (1923))、日本もしくは東アジアの物語群が 17 世紀から 18 世紀初頭にかけてヨーロッパに伝わり、それをスウィフトが利用した可能性が考えられる。したがって、研究の第三段階にあたる文献そのものの往来についての調査・分析を、この第二段階の途中から部分的に始める必要がある。

研究四年目から五年目においては、研究第一段階における基礎調査と第二段階における個別作家の作品における日本表象の機能分析を受け、研究の第三段階である文献そのものの伝播についての調査を進める。これは、こうした文献の所在を記した各地の図書館や公文書館の目録を網羅的に調査することを中心とする。大英図書館をはじめとするイギリス国内の調査はもちろんであるが、特に名誉革命期から 1714 年のハノーヴァー朝の成立期における英蘭関係および鎖国下の日蘭関係については、有数の日本関係の文献コレクションを有するオランダのライデン大学図書館での調査も必要になる。五年目の最終年度には、主に研究の第二段階、第三段階の成果を踏まえ、三人の作家の個別的事情と、それらを統合的に論じた近代英文学史そのものにおける日本表象の位置づけについて、これをそれぞれ学術論文の形で国内外の学術誌に報告する予定である。

本研究は史料調査をもとにした実証的な研究を標榜するものであり、史料の調査分析を進める限りにおいて一定の成果が確実に期待されるが、例えばサルマナザールのように、関連する十分な史料を得られないという可能性も否定することはできない。しかしその場合でも、多岐にわたる日本表象の一端を明らかにすることは可能であり、学術的貢献は十分に果たしうると言えよう。また本研究は、資料整理などに大学院生等の助力を得ることを想定してはいるが、原則として、研究代表者個人が調査および分析を進めることを前提としており、研究体制上、特に連携に関する問題はない。しかし、近代英文学における日本表象の意味に関する統合的な研究成果は、当然のことながら、海外の研究者との学術的意見交換によって精度の向上が期待されることから、研究最終年度にあつては、近年の国際学会の動向などを踏まえ、日本において、海外の研究者を交えた公開シンポジウムの開催を予定している。そしてこのシンポジウムをもとに、本研究の成果を英語文献として刊行することで、本研究の成果を広く国外にも伝えることができると考える。